

# 観測部月報

★

東亞天文協會

## ★ 流星課だより (99)

小 槇 孝 二 郎

謹みて皇紀二六〇〇年の輝かしき歳旦を賀し奉る。

×            ×            ×            ×

月始めの四分儀流星群は、2日に月が下弦となる爲め夜明け前の観測を幾分妨害されるが、豊富な流星群なので極大の4日の朝にはかなり見事な出現を見せるであらう。昨年の不成績をとりかへしたい。

一月末から二月上旬にかけて牧夫座北部から速度の速い流星が見られるが、これも月光の邪魔を受ける。

山本一清博士及びプラ1グのグリト氏によれば、二月1日12時、我が地球はハセル岡林彗星の軌道の降交點を通過する爲め流星群の出現が豫想される。これは既に急報355號でのべられた事であるが、其後の研究によつて、

通過する時刻は 二月1.24日 (U. T.) [1日15時(日本標準時)]

地球と彗星軌道間の距離は 0.082 (天文單位)

輻射點             $\begin{cases} a = 251.94 \\ \delta = -4.01 \end{cases}$  (蛇座30番星附近)

日★運動は             $\begin{cases} \Delta a = +0.958 \\ \Delta \delta = -0.122 \end{cases}$

と發表されてゐる。地球が彗星の昇交點を通過したる昨年の八月4日には豫想の流星群は殆んど見られなかつたと云つてよく、今度の場合は一層距離が遠い爲め、出現の可能性は薄いのであるが、一應の探索は是非せねばならない。輻射點は3時頃東天に昇る爲め5時半頃まで約2時間半の観測は可能である。一月31日、1日、2日の3日間を観測豫定日とする。

×            ×            ×            ×

十一月の獅子座流星群は極大の頃悪天なりし爲め筆者は観測不可能であつたが、香川縣觀音寺町の川人武正氏は14, 15, 16, 18日四夜に亘りこの流星群を目標として観測を行はれた。計17個の流星を得てゐるが流星圖の添付なきため同群の出現程度は判明しない。他の観測者のものは未着である。

十一月2日18時13分、負5等の火球が京都、和歌山及び五西月(和歌山縣有田

郡) から見られた。観測はいつでも粗悪なる爲め實経路の推定は困難の様であるが目下研究中である。(XII 3)

### ★ 太陽 課 (1939年11月)

報告者 13名 (前月より1名減)

新報告者 谷口裕康氏 神戸市葺合區 4cm 屈折 50× 直視

來田 晃氏 大阪市大正區 5cm 反射 53× 直視

南 時生氏 大阪市明星商業 (織田, 岡村兩氏に代る)

天候 先づ普通の11月並みであつた。各個人別には依然として15日前後に止まつて居るのは残念である。全員で補へば4日, 22日の兩日が缺けた。

概況 明らかに, 前月に比較して静謐となつた。約20~30%位平均相對數が減少した。

肉眼的黒點	坂上	津留	木邊	正村	合計
観測日數	10	10	10	21	51
出現日數	2	1	7	8	18
黒點群數	2	2	2	5	5
可視黒點累計數	2	2	7	14	25

以上の平均に依れば, 出現比は0.35であり, この點でも前月よりは淋しくなつた。しかも所謂大黒點群と云ふものは出現しなかつたらしい。

(前號, 黒點群累計數は可視黒點累計數と改めます。數字は不變)

南北兩半球別の比較	津留	來田	南	木邊	山田	香掛	阿部
南	49.4	53.6	50.5	49.1	34.2	41.5	49.9
北	32.2	14.0	28.2	28.7	29.1	50.5	27.6

7名の平均に依ると, 南1.00に對して北0.64, 即ち南61%, 北39%であつて, 再び南が多くなつた。各個人別に見ると, この方面の最も古い経験者である香掛氏の分が逆の結果になつて居るのに氣付くが, これは殆んど南半球にのみ黒點群の出現した下旬に, 僅か一日しか観測がなかつた爲であると思はれる。

其他 香掛氏よりは例月通りの各黒點群概略緯度を, 投影法により測定報告された。其れに依れば, 南北共に $30^\circ$ を越すものはなかつた様である(下旬の南半球の群は不明)。阿部氏よりは前月(10月分)の各黒點群の可なり精密な位置のスケッチを送付。特に來年度からは, 同様の事を本田氏が行ふ筈であるから其の繼續を望む。來田氏よりは18日13時30分, 太陽面を流星が通過したとの報告を, 其の徑路スケッチと共に受けたが, 之をば流星と連斷する事は危険だらう。かゝる事は筆者も二三度経験した事もあり, 又, かつて報告もあつた様に記憶するが, 多分, 相當高空を飛翔した鳥か, 昆虫ではあるまいか? 若し流星とすれば, 光輝の強い太陽面を通過するのが5cmの小望遠鏡に認められる爲に

黑點相對數報告 (1939年11月)

觀測者(觀測地)	坂上 務(福岡市大名町)	津留 繁雄(熊本市本莊町)	谷口 裕康(神戸市葦合區)	來田 晃(大阪市大正區)	南 時生(大阪市明星商業)	木邊 成麿(滋賀縣中里村)	正村 一忠(岐阜市溝旗町)	山田 達雄(愛知縣犬山町)	大石 辰次(靜岡縣吉永村)	沓掛 七二(長野縣青木村)	すばる會(橫濱市)	小石久太郎(東京市神田區)	阿部 正明(東京市池袋)	片山 八郎(東京市立一中)
口徑mm	40 42	130	40	50	25	75	25	69	55	102	20	58	28	50
倍率	32 60	45	50	53	54	60	48	44	64	75	50	64	45	32
方法	投	投	直	直	直	直	直	直投	直	直	直投	直	投	投
1	曇	99		66	104	缺	47	81	曇	103		曇	曇	報告
2	83	93		80	114	75	72	83	〃	98		〃	缺	未
3	89	99		80	111	95	曇	〃	〃	104		〃	87	着
4	82	雨		雨	缺	雨	61	〃	〃	〃		〃	曇	
5	88	曇		77	83	94	〃	〃	〃	〃		〃	91	
6	曇			〃	78	〃	〃	〃	〃	〃		〃	〃	
7	〃	96		〃	97	〃	〃	〃	〃	〃		〃	〃	
8	〃	曇		〃	103	〃	〃	〃	〃	〃		〃	〃	
9	〃	曇		〃	雨	23	〃	〃	〃	〃		〃	〃	
10	〃	旅		〃	61	曇	〃	〃	〃	〃		〃	雨	
11	〃	76	52	〃	69	〃	37	〃	〃	83		〃	74	
12	〃	缺	116	〃	91	〃	52	〃	〃	104	81	〃	90	
13	〃	〃	〃	〃	〃	〃	67	〃	〃	〃		〃	89	
14	〃	曇	〃	〃	94	〃	72	〃	〃	100		〃	雨	
15	〃	雨	〃	〃	缺	〃	曇	〃	〃	〃		〃	81	
16	82	〃	曇	曇	曇	曇	〃	〃	〃	〃		73	134	
17	曇	〃	64	〃	106	117	〃	〃	〃	〃		曇	〃	
18	〃	〃	缺	82	117	曇	〃	〃	〃	〃		〃	〃	
19	103	〃	78	87	85	〃	缺	〃	〃	〃		〃	〃	
20	100	〃	53	曇	58	45	27	53	雨	〃		〃	〃	
21	雨	〃	缺	缺	52	61	缺	缺	57	〃		〃	50	
22	〃	〃	〃	〃	雨	〃	雨	〃	〃	〃		〃	雨	
23	〃	〃	〃	〃	〃	58	曇	〃	〃	〃		〃	81	
24	92	〃	〃	〃	71	70	〃	〃	〃	〃		〃	曇	
25	〃	〃	〃	〃	78	〃	〃	〃	〃	〃		〃	〃	
26	〃	〃	38	62	51	77	68	〃	50	〃	62	57	73	
27	曇	69	缺	缺	缺	98	缺	〃	46	〃	79	59	74	
28	78	82	〃	38	38	80	48	〃	45	〃		50	51	
29	曇	曇	73	45	36	67	37	〃	曇	〃		病	缺	
30	67	〃	缺	48	43	缺	曇	〃	32	〃		〃	52	
觀測日數	10	9	9	12	19	15	18	8	11	12	3	7	15	
一日均	87	82	66	68	79	78	49	63	66	92	—	70	77	
前平均	111	—	—	—	—	98	86	—	85	111	110	116	107	

は尠くとも5秒角位の視直徑が必要であり、假りに100キロ上空であれば、直徑大約3~4m位あらうから、隕石としても最低50トン以上の巨大なものになつて来る、且つ太陽面も通過するのに $\frac{3}{4}$ ~1秒間も要する様では、餘程自分の方向近くに向つて落下したと考へねばならない。報告された事は多とするが、他の諸君にも一應御注意して置く。勿論かゝる疑問黒點の徑過をば全然無視せよと云ふのではないが。

**課告** 明年の一月一日以降の觀測報告は、廣島縣沼隈郡瀬戸村 黃道光觀測所 本田實宛 に變更します。但し本年12月中の觀測は、京都市上京區 東三本木 信樂方 木邊宛です。

### ★ 變光星課 (1939年8,9月分)

概況報告を掲載中、紙面の都合上、月々の課報を休載して居たが、概略に各課員の觀測状態を示すと

氏名	1939年8月						1939年9月					
	第一部		第二部		計		第一部		第二部		計	
	星數	目測數	星數	目測數	星數	目測數	星數	目測數	星數	目測數	星數	目測數
木邊成麿	5	22	24	168	29	190	5	23	21	139	26	162
小澤喜一	1	6	16	61	17	67	3	20	30	243	33	263
岡林滋樹	14	47	1	10	15	57	6	19			6	19
山田達雄							3	7			3	7
清水直次							3	8	1	3	4	11
吉池浩暢							9	33	1	7	10	40
坂部博一							3	17				
津留繁雄	3	4			3	4	9	12				
合計	21	79	27	239	48	358	28	139	33	392	61	531

上表の如くである。夏季は例年好成績ではないが、秋涼と共に觀測は増加し始めた。次回には10月、11月分と共に一ケ年の通算を發表したいから報告洩れの方は、各自の觀測帳と照らし合せて、至急に追報を乞ふ。

**課告** 本年度上半期の發表は別刷しましたから、入要の方は御申込下さい。(報告の出で居る方は無料、出で居ない方は別刷代12錢を切手で御送り下されば宜しい)。

**報告先變更** 本年12月中の觀測は今迄通り、1940年1月1日以降の觀測は岡山縣 倉敷市住吉町 倉敷天文臺 岡林滋樹宛に願ひます。(以上 木邊記)

### ★ 遊星面課

火星の觀測も終了し、目下伊達課長の手許で整理中、次號天界より綜合結果をば連載報告します。(幹事 木邊記)

## ★ 彗 星 課

1939年中に發見された彗星の一覽表は下の通り、

順 序	發 見 者	彗星の名	發見の日	近日點通過
1939 a	コジク氏, ヘルテヤ氏	(新)	一月17日	二月 6日
1939 b	ヱイサラ氏	(新)	二月 8日	二月16日
1939 c	ジェフアス氏	ボン, キンネケ	三月17日	六月24日
1939 d	ハセル氏, 岡林氏等	(新)	四月15日	四月10日
1939 e	ワンピースブルク氏	コ ブ	四月22日	三月12日
1939 f	ジャクソン氏	ジヴスマン, ワハマ	六月12日	(五月15日, 1925年)
1939 g	ジェフアス氏等	第二ブルクス	六月17日	九月15日
1939 h	リゴレ1氏	(新)	七月28日	八月 9日
1939 i	カミンスキ氏	(新)	七月24日	?
1939 k	ジェフアス氏	タトル	八月12日	十一月10日
1939 l	ワンピースブルグ氏	ジャコピニ	十月15日	(二月17日, 1940年)
1939 m	ジェフアス氏	フ エ	十一月 3日	(四月23日, 1940年)
1939 n	フレンド氏, 岡林氏	(新)	十一月 4日	十一月 5日

尙ほ此の外に、ボレリ(急報359), ヲルフ(急報376)の二彗星が近づいて來てゐるから、近日中、誰かに發見されるだらう。

## 世界中の氣候が漸次に暖くなる！

米國=ウヨ1ク市にあるアメリカ物理學院で、昨年末、溫度に関する座談會が催された時、ワシントン府の米國氣象局のキング J. B. Kinger 氏が發したところによると、“氣候學者は、一般に人類の歴史時代に於ける地球世界の氣候は可なり安定なもので、尤も比較的短週期の著しい變動はあるけれど、長期にわたる變動は無いと思つてゐた。ところが、今世紀になつて以來、全世界に至るところ、氣溫が少しづつ上并してゐる事實が知れて來たので、今までの氣候安定説は修正を必要とするに至つた”と述べた。

## 成 層 圏 の 温 度

米國ハーバード大學天文臺のホイプル F. L. Whipple 博士が、カメラの筒先きに回轉盤を取りつけて、流星の速度と光度とを同時に觀測した結果によると、地上60軒あたりの成層圏では、氣溫が水の沸騰する 160°C 以上に達する。又、地上110軒の上空では、氣溫が 28°C で、室内の溫度より少しく高いぐらゐだといふ。